産　経　新　聞　（第3種郵便物認可）

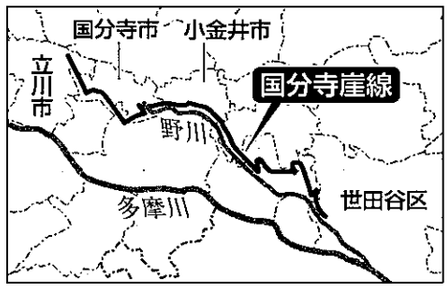
小金井に多い「はけ」って何？

水を「吐く」傾斜地の窪地

「土地の人はなぜそこが『はけ』と呼ばれるかを知らない」。作家・大岡昇平の恋愛小説「武蔵野夫人」（1950年発表）は、この一文から始まる。小説の舞台は小金井市周辺。「はけの森美術館」や「はけの小路」「はけのおいしい朝市」など市内ではけと付く名が多く使われているが、はけとは一体何だろう。

東京探Q

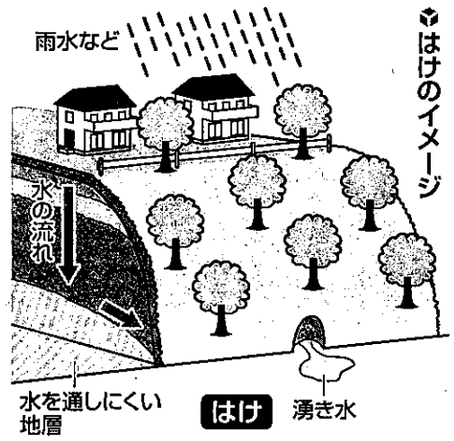
「はけの道」は、小金井市内で東西に続く約2キロの一本道だ。武蔵野台地が古い多摩川によって削られてできた「国分寺崖線」（立川市から世田谷区成城までの約20キロ）と野川に沿っており、歩くと崖の斜面に緑地や雑木林がグリーンベルトのように広がる。その間に坂や階段、湧き水スポットがいくつもあって趣ある風景が続く。



小金井を紹介する観光本には「はけ＝国分寺崖線」と紹介されたものもあるが、「武蔵野夫人」のページをめくると、「『はけ』はすなわち、『峡』にほかならず、（中略）道に流れ出る水を溯って斜面深く喰い込んだ、一つの窪地を指すものらしい」と書かれている。

そこで、地図学が専門で「崖博士」として知られる東京経済大学客員教授の芳賀啓さん(69)に尋ねると、「『武蔵野夫人』の通り、はけは崖線から一段階へこんだ『窪地』を指す言葉です」と説明を受けた。

芳賀啓さん



はけのイメージ

湧き水スポットいくつも

芳賀さんによると、はけは、水を通しにくい地層の上にある雨水をためた地層が崖に現れ、そこから出た湧き水が崖を侵食してできたもの。全国に同様の地形は見られるが、武蔵野地域では、特にこうした傾斜地の窪地がはけと呼ばれているという。水を「吐く」地であることからこうなったらしい。

府中市の「ハケ下」「ハケ上」、調布市の「羽毛下通り」……。確かに武蔵野地域周辺ではけにちなむとされる場所や道があり、近くに崖もある。

小金井市によると、小金井の地名は「黄金に値する豊かな水が湧く」ことに由来するという。はけに立地する貫井神社など市内3か所の湧き水は、「東京の名湧水」にも選ばれている。市内の川沿いには石器時代の集落跡も数多く見つかっており、古くから人々が小金井の湧き水に集って暮らしてきたことがわかる。

そして、国分寺崖線のはけの湧き水が集まってできたのが市内や世田谷区などを流れる野川だ。流域は緑豊か。ゲンジボタルが自生する湧水源があり、バードウォッチングなども盛んだ。

はけや野川の自然に魅了された人は多い。

世田谷区のボランティア団体「野川とハケの森の会」は、探鳥会や野川の清掃活動などを行っている。中川清史会長(79)は「はけが育んできた豊かな自然を後世に残したい」と語る。

NPO法人「グリーンネックレス」理事の野口由紀子さん(70)（国分寺市）は、「はけの魅力を伝えたい」と「はけ本」の出版を目指している。「はけが最も美しいのは冬。崖に沿って日だまりができ、落ち葉や水面がキラキラと輝く。歩くと気持ちがいい」と話す。

絶好のはけ歩きシーズンの今、ぜひ足を運んでみてはいかがだろう。（福益博子）

❶国分寺崖線のはけにある貫井神社。周囲は崖に囲まれており、湧水由来の池がある❷「はけの道」につながっている遊歩道「はけの小路」。道沿いには水路がある（いずれも小金井市で）